

自伝¹

1800年までの第一期

Erste Zeit bis 1800.

【1783-1800. S.B. I 003-015 / TB. I 003-013²】

我が家の姓は通常フランス出身かと思わせるが、本来そうではない。父の両親はリエージュ〔現ベルギー東部〕出身だからである。祖父ハドリアン・ボアスレは名誉ある役人で、最初はマーストリヒト近郊のユイ³で、のちにはシュトケム⁴で勤務に就いた。シュトケムでリエージュ出身のマリア・ドゥ・トングルと再婚し、そこで1736年わが父ニコラスが生まれた。母も外国の名前を持っている。母の父親はブレンターノと言ひ、ケルンの名誉ある豪商であった。しかし母の母親ゲルトルード・ミュルトゲンスは、最も尊敬された商人身分に数えられるケルン在住の生粋のドイツ人家庭に属した。彼女は25歳ですでに未亡人になったが、彼女のひとり子マリア・マグダレーナがわが母である。豊かではあるが子どものいない叔父ニコラス・ド・トングレが父にケルンへ来るよう促し、そこで父に商業の一部を任せ、のちに筆頭相続人に据えた。

わが愛する両親は結婚して11人の子どもをもうけた。そのうちの1人は幼くして死んだ。私は最後から2番目で、1783年8月3日、日曜の朝に生まれた。私の名づけ親〔代父〕はラングヴァーデンの司祭ヨハン・ズルピーツ・ポールス氏で、代母は祖母ブレンターノであった。私はヨハン・ズルピーツ・メルヒオア・ドミニクスという名前を得た。末っ子が生まれたのは1786年で、7番目の息子である。彼は洗礼のときにメルヒオア・ヘルマン・ヨーゼフ・ゲオルクという名をもらった。父は彼をいつもわがベイヤミンと呼んでいた。(以上柴田訳・以下は石川訳)【004】 | 【005】

ごくごく幼かったころから、私はこの弟とは切っても切り離せない生活を送っていた。年齢の点でも、弟は他の兄たちよりも私には近しかったのである。幼くして死んだペーター兄さんは天国にいるちいさな天使だと、たくさんの人が私にそれは美しく話してくれたものだから、私はいつも兄をあこがれていたものだった。私たちの家族が親しく交際していたショル家の子供たちが、ときどき駕籠に乘せられて我が家に遊びに連れてこられていたのは、かなり早いうちから気づいてもいた。その中には私の初恋の人だった幼いシュティネットヒェンもいた。1789年の父の洗礼名の日のお祝いは今でも生き生きと思い出すことができる。お祝いのそれは盛大な晩餐会が、我が家の新しい大広間で執り行われ、その席にはブレダの牡蠣と雄鶏の肉は欠かせないものだった。この家族のお祝いには、日も短い寒い12月のことだ

¹ 石川補注：以下のテキストは未だ暫定版である。今後、修正と補注を重ねていくものとする。なお、以下のテキストでは、Bild は絵画ないしは形象、Gemälde は彩色画、Malerei は絵画一般と訳し分け、適宜原語を添えておくことにする。当初の柴田訳では、「Bild と Gemälde と Malerei をどのように訳し分けるべきか決断がつかなかったので、原語のままとしておいた」という注がついていた。

² 石川補注：TB. I にもこの自伝抄は収められている。ここでは S.B. I のテキストを用いる。

³ 石川補注：Huy はマーストリヒトから南西へ国境を越えてマース川を遡ること 40Km ほどにあるベルギーの街。マーストリヒトとユイのほぼ中間にあるのがリエージュ。

⁴ 石川補注：Stockem はラインラント・プファルツ州の街。ルクセンブルクとの国境に近い。

ったにもかかわらず、リエージュからの友人たちまで集まった。彼らがリンブルクのことば⁵でしゃべるのをわたしたちは初めて聞いたのだった。父以外は家中の誰にも理解できなかった。私たちの母は重い褐色の絹の礼服で美しく着飾って、お祝いの席に着いていた。だが、それよりも記憶に残っているのは、白や青の部屋着を着ている愛する母の姿だったり、あるいは黒絹のショールをかぶって朝早くに教会に行く姿であった。母はとても経験で、司祭様方や修道司祭様方、尼僧の皆さんと交際することを好んだ。聖職者の方たちもしばしば我が家を訪問されたものである。

1790年5月6日に私の愛するお優しい母上が亡くなった。私はやっと7歳になったばかりで、下の弟のメルヒオア⁶同様、母の死の床に連れてこられても、それがどういうことなのか全く解らず、老女中のクリスティーネに、なにかもっと感動的なことでも考えるよう促されるほどであった。アウグスティーネ修道院での葬儀のミサのことはおぼろげにしか覚えていない。

この年の夏に、ラングヴァーデン (Langwaden) を初めて訪れ、その地で祖母とともに暮らすことができたのが、印象に残っている。まず荒涼としたフューリングの荒野 (Fühlinger Heide) を超える。だがすぐに修道院の所有になる大きくて見事なブナの森に至る。私はまだ森を見たことがなかったので、大きな歓声をあげた⁷。【005】 | 【006】 以下略

⁵ 石川補注：オランダ南端のリンブルフ (Limburg) 州とそれに隣接するベルギー東端のリンブルフ州およびドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州西部で話されている低地ドイツ語の方言。東短からベルギーのリンブルフ (Limburg) 州・

⁶ 石川補注：Melchior Hermann Joseph Georg Boisserée (1786-1851). Johann Sulpice (Sulpiz) Melchior Dominikus Boisserée, (ズルピーツ・ボアスレ, 1783-1854) の弟。

⁷ 石川補注：Langwaden はデュッセルドルフ南西 10Km 程のライン川の対岸にある村。Fühlinger はケルン北西 10Km 程にある地名。言及されている修道院については不明。

1800年から1808年までの自伝断片
Fragment einer Selbstbiographie, 1800 bis 1808.

【1800-1808. S.B. I 015-045 / TB. I 014-040】

1800年9月に私がハンブルクから戻って以来、私の兄弟と親類は、私が生まれ故郷の両親の家で快適に気楽に生活できるよう配慮してくれた。私たちの親愛なる祖母である後見人は、私に対してつねに寛大で愛情に満ちていた。兄たちは、庭にある古風な家に数部屋設け、私が静かに勉強できるようにしてくれた。私はそこに本やイギリスの地図、ハンブルクの記念品すべて、【015】 | 【016】有名人の肖像を並べた。私の健康を維持するため乗馬用の馬を買ってくれた。また、親しくなった書店主ペルテと絶えず交流して、選りすぐりの書物を入手した。しかし、長らく荒廃しいまやまったくフランス国境の一地方に落ちぶれた昔の帝国都市の限られた状況では、ドイツの最も重要な港町での雄大な商業生活の代わりになるものは何もなかった。快適ではあるが単調な家族の枠内では、精神的に刺激的で多面的に考えることのできる社交界を補填しうるものは何もなかった。そういう社交界に私を慣れさせてくれたのは、ライマールス博士⁸と私に極めて親切にしてくれたその夫人の家であった。顔の発疹が冬になると頻発し私を圧迫した。しかしながら、成年がつねに新たな希望にとらわれるように、私も遥かふたたび遠くのものへの思いに熱中した。イギリス滞在であるとか偉大な航海であるとかが私の願望の背後にあったが、それを実行する見込みはなかったであろう。この半分不満ながら半分期待に満ちた気分で私は夏の始めに私の製本工のところで、生き活きた目を持つ一人の巻き毛の若者と出会った。彼は、その振る舞いから、さらにそれ以上に文学に関する才気に富み、しばしば大胆な表現で、私に非常に深い印象を与えた。それは、復活祭ミサの直後に届いた文学上の新作を製本工のところで手にとって読めるようになった時であった。会話はじきにシュレーゲル兄弟、特にフリードリヒに及んだ。天才的ではあるがあまりに急に現れたこの2人の人物に対してこの若者が示した無条件の熱狂は、私には理解できなかった。じっさい私はハンブルクの学校出身で、そこではドイツ文壇への尊敬がまだあり、シラーとゲーテはたいがい自由すぎると思われており、ヴィーラント⁹やフォス¹⁰、マッティソン¹¹、W・フォン・フンボルト¹²その他に対する雑誌『アテネウム』¹³の無礼な冗談に不快感を抱いていた。私たちはやがて活発な議論を展開し、帰路もずっと続けたが、双方とももっとお互いを良く知りたいと願って、この議論をやめた。そこで知ったことであるが、彼の名前はベルトラム¹⁴と言い、彼の両親の家は【016】 | 【017】我が家のすぐ近くであった。私はこれまで年長の人たちとのみ交わり、彼らとの会話から学んできたが、私の近くにいた若い人たちからは、ベルトラムと同じほど豊か精神や教養、さらに伝達の才能を持った者はまだ一人も現れなかった。私たちは躊躇うことなく再会を誓った。私たちの生活諸規定は互いに異なるが、私たちの運命にどこか似たものがあるということがやがて明らかになった。ベル

⁸ 石川補注：Johann. Albrecht Heinrich. Reimarus, 1729-1814, ハンブルク生まれの医師、哲学者。

⁹ 石川補注：Christoph Martin Wieland (1733-1813). ドイツの古典主義の詩人。

¹⁰ 石川補注：Johann Heinrich Voß (Voss) (1751-1826). 詩人。

¹¹ 石川補注：Friedrich von Matthisson (1761-1831). 初期ロマン派の詩人。

¹² 石川補注：Friedrich Wilhelm Christian Karl Ferdinand Freiherr von Humboldt (1767-183). 言語学者にしてプロイセンの政治家。弟は博物学者 Friedrich Wilhelm Christian Karl Ferdinand Freiherr von Humboldt (1767-1835)。

¹³ 石川補注：“Athenaeum”はシュレーゲル兄弟が編集・出版した雑誌。第1巻が1798年に、第2巻が1799年に、第3巻が1800年に刊行されて終結した。

¹⁴ 石川補注：Johann Baptist Bertram (1776-1841). ボアスレ兄弟とともにコレクションを携わった共同研究者。

トラムは私より 7 歳年長で、法律を進路に選んでいるが、私と同様に先般異国から荒れ果てた祖国へ帰ってきたが、私と同様に精神的な娯楽がここには欠けていると思っていた。私の新しい友人は、1797 年秋をエアランゲン大学で過ごし、グリュック¹⁵のもとでパンデクテン¹⁶を聴講したが、特に好んで哲学研究に没頭した。特にフィヒテに基づいてグロス¹⁷が講義した自然法や、カントとフィヒテに基づいてメーメル¹⁸が講義した論理学、道徳、美学に没頭した。ベルトラムはこれらの研究と同時に学生生活について非常な熱意を持って生き活きと語る術を得ており、私はすっかりそれにとらわれた。私が健康のため短期間アーヘンへ湯治旅行に出なければならなかった時、2 ヶ月間継続して手紙を交換し始め、若者らしい交友を固め、友情を高めることとなった（以上柴田訳）。

……中略……

〔以下柴田訳：前段の最後の一文：私は 1803 年秋に、当時隆盛を誇っていたイエナ大学に通う決意を固め、友人のベルトラムも私と同行してそこへ行きたいと希望した。〕

私の変更が、私のすぐ近くにいる弟のメルヒオアに影響を与えたい。彼の学習動機はこれに刺激を受けた。彼は私より 3 歳ほど若く、まだ職業選択が決まっていなかった。彼は私よりすでに 1 年前に両親の家を出て、ニーダーラインとホーランドとの国境を拠点とするサルムサルム侯の小さな都にある、当時非常に好ましいとされた施設で教育を受けていた。私たちがケルンに戻ったのはほぼ同時であった。メルヒオアはその中央学校でとくにクランプ教授のもとで数学、物理学、化学に非常に熱心に取り組んでいる。文学と哲学研究にはほとんど従事しなかった。彼はいま、私とベルトラムに鼓舞されてそれに取り組んだ。彼が家族との関係でアントワープに行って 9 ヶ月間滞在しなければならなかった時、私たちと頻繁に手紙を交わしたが、そこでベルトラムは文書伝達でも豊かな教育的才能を発揮し親しみある熱意を示したので、メルヒオアのつねに感謝に満ちた気持ちに大きな持続的影響を与えた。私はスヘルデ河畔に彼が滞在している時彼を訪ねたが、その短い旅行中初めてルーヴァン、メヘレン、ブリュッセル、アントワープの中世建築のすばらしい文化遺産を嘆賞した。ニーダーラインに関するゲオルク・フォルスターの意見は、この旅行で私のガイドとなった。彼は以前にも、ケルン大聖堂に対する私の青年年の尊敬の念の拠り所として、中世的なもの一切を軽蔑する人たちに反対したり、またデュッセルドルフで画廊を再建する際にも支えになってくれた。【020】 | 【021】この有名な Gemälde コレクションは、周知のように、戦争中エルベ地方に避難していた。1801 年のリュネヴィル講和後、このコレクションは非常に適切な画廊に戻された。私は、利発な商人で義兄のベッカーのそばにいる一番若い私の姉のマドレーネのところに滞在することで、このデュッセルドルフの芸術品を鑑賞する機会をたびたび得た。ベルギーでは、国内の偉大な画家による多くの芸術作品にとってこれほど有利な運命が支配することは

¹⁵ 石川補注：Christian Friedrich von Glück (1755 – 1831) 法学者。

¹⁶ 石川補注：『ローマ法大全 (Corpus Iuris Civilis)』に含まれる『学説彙纂』(pandectes, pandectae/digesta) のこと。判例に対する諸学説を整理・要約したもの。ここで言われているのは、当時のドイツで盛んに研究されていたパンデクテン法学を指し、民法を、総則から始めて物権・債権・親族・相続等と整理して記述する。それらの各篇もまた、総則から始まって体系的に記述される。日本の現行民法もパンデクテン方式を採用している。

¹⁷ 石川補注：Carl Heinrich von Gros (1765-1840) 法学者・法律家。ヴュルテンベルクの枢密顧問官。エアランゲン大学で法学を教授した。

¹⁸

なかった。たいていの *Gemälde* がパリに持ち掠られた。アントワープにたった 1 枚の *Gemälde*、ルーベンス自身が聖ルカ教会に寄贈したかの「聖家族」が置き忘れられているのみである。

大学に入る準備をしている私のような若者が芸術にも注目し、そうなるきっかけになるさまざまな事情が集まるということが意外だとは思えない。大きな教会、すなわち私が子どもの時から目の前に見てきた大聖堂によって、私はすでにずっと前から古い教会建築術に魅力を感じていた。ところで私は、友人ベルトラムの美学研究に対する支配的傾向のもとで、ここ数年来ゲーテやティーク、シュレーゲルのような人物が教養界を芸術に参画せしめようとしている文書に精通するようになった。とくに 1798 年から 1800 年の『列柱門』や、1797 年の芸術を愛好する修道士の心情吐露、1798 年のシュテルンバルトの遍歴、1799 年のティークによる芸術に関する空想、1800 年の W・シュレーゲルの詩とフリードリヒ・シュレーゲル（『ヨーロッパ』1803 年）。これらによって長い間見ることでできなかったコレクションの再公開や、とくにイタリアとオランダから借りた芸術作品の展示がパリで一緒に行われたりした。大きな運動が起き、あらゆる新聞が、いまやパリに古代ないしキリスト教時代の最も有名な芸術作品がまとめて見られることの利点と便利さについて語った。こうした作品は通常さまざまな国や都市へはるばる旅をして探し出さなければならぬものであった。かくして芸術家や芸術愛好家、好奇心の強い人たちがこれを見る目的でフランスの首都へ群れなしてやってきた。さらにまたそれ自体は確かに小さなことではあるが場所的かつ個人的な関係から私たちににとって重要なことがら、すなわち芸術に私たちの【021】 | 【022】眼を向けるということが同時に働いた。とくに当時の諸関係からして次のような出来事がそれに当てはまる。すなわち、我が同朋の画家ヨーゼフ・ホフマンがヴァルラフ教授の助言に支えられて相次いで 2 度、ヴァイマルの芸術愛好家が彼らの課題を最も良く解決した者に授与する賞を獲得したことである。それはレススの死とスキロス島でのアキレウスを描写するものであった。私たちはゲーテの判断によって非常に尊敬され高められたこの人物と知り合いになった。また、デュッセルドルフで若きペーター・コルネリウスと知り合いになることに躊躇うことはなかった。彼は、いくらか年長のホフマンの例に従い、ヴァイマルの展示でも働き、賞も得た。

これら一切は私たちが一般に芸術に関与するのを証明するであろうし、したがって、後の展開で特別の意味を持つことがなかったならばなんら言及するに値しないであろう。より重要なことは、私たちが私たちの友人ベルトラムの冷静な提案でパリに向けて行った遠距離旅行であった。だがこの旅行も、そこでまじめな格言「人は考え、神は導く」が証明されなければ私たちの生活過程への本来的な影響を及ぼすこともなく終わったであろう。というのも、この小旅行は、3 週間で新しい世界都市の栄光を見るためのはずであったからである。私の弟メルヒオアは 8 月末にアントワープへ帰った。私たちはすぐに彼をパリに同行するよう説き伏せたが、その後イエナに移住するあらゆる準備もした。また、パリ旅行が若者の愚行と見なされ妨げられるという感情から、私たちはこの計画を黙っていた。9 月半ば、私たちはデュッセルドルフへ行き、そこでお金をもらい、アーヘンとブリュッセルを経てまっすぐパリへ向かい、1803 年 9 月 20 日無事パリに着いた。

巨大都市は私たちをあらゆる面から引きつけ、私たちはそれを見る目を十分持ち合わせてはいなかった。チュイルリー宮殿前での第一執政官の大規模な観兵式、「自由、平等、または死を！」という黒い碑文を伴った革命の痕跡。公共の建物と庭園、広い並木道の散歩、劇場、図書館、芸術コレクション、最後に付近にあるお城も、すべて見たいと思った。【022】 | 【023】

日々は急速に過ぎ去り、私たちの活動的な生活が、秋の湿っぽい天気で私の健康に悪影響を及ぼし始

めた時には、決められた時間はもうほとんど終わりに近づいていた。私のいつもの皮膚病が再び強度を増した。医者意見を聞かねばならなかった。そのことで私たちの計画がすべて狂った。イエナへの旅行をするには遅すぎた。こうした困窮のなかで、フリードリヒ・シュレーゲルの友情が私たちを助けてくれた。私が病気になる直前に私たちはこの卓越した男性の知己を得て、私たちが彼と彼の妻のもとで見出した好意的な接待によって非常に良き印象を受けた。私たちは信頼を得て彼に提案し、もし彼が私たちのために講義をし、私たちを彼の住居に受け入れてくれる気があれば、私たちはこの冬中パリに留まるであろう、と。私たちはこのような考えに至った。というのも、もともとサンスクリットの研究のためにパリにいるシュレーゲルは、併行して文学についてドイツ語の講義をしようと思っていたからである。彼は宮殿と庭園の間にある町の静かな地区に数人の知人達と一緒に 1 つの階に住んでいた。そこにいくつかまだ空き部屋があった。あらゆる状況が私たちの新たな計画に好都合であった。私たちはすぐに、冬のために確保されていた部屋に泊まることを享受した。親切であるとともに機知に富むドイツ同朋のもとに宿泊することは、とくに病気がちな私にとって最大の価値があった。病気が悪化し、私は何日も床につき長時間部屋の番をしなければならなかった。その間私はシュレーゲル夫人とイエナから来たドイツ人医師ハルバウアー博士による丁寧な世話を受けた。この医師はすでにパリで多くの信頼を得ており、のちに、再建されたルーヴランの大学の事務局長という名誉ある地位に就いた。私の弟とベルトラムは、彼らを取り巻く新たな世界の中で活発に動き回り、おしゃべりをした。窓から私は、遠くまでのびた町の大部分を遠望することができた。というのも、私たちの家はクリシー通りの高台にあったからであり、そこはかつて、エルベシウスやディドロ、ミラボーとともにしばしば名前の挙がるプファルツのドルバック男爵のホテルであった。彼は『自然の体系』の著者と見なされていた。現在の所有者は密かに生きている富裕者で【023】 | 【024】喜劇場モンタンシエの共同所有者であった。啓蒙の精神がこのホテルではまだ消滅していなかった一つの証明を私たちに与えた小さいが元気なドアマン、カールがいて、彼は床を磨くとともに自ら堆肥にまみれて働いたが、その結果、髪にパウダーを塗ったり弁髪にしたりしても汚らしかった。この人の子に私たちはクリスマスの催しの際に、ミサに行かないのか、教皇和約以来ミサが再度行われるのを知っているかと尋ねた。これに対して彼はこう答えた。Bah, il faut bien une religion pour le peuples, mais moi je m'en passe! 「ふん、宗教は人民のためになきゃならねえと言っても、俺には関係ないや」。フリードリヒ・シュレーゲルとともにもちろんだドルバック男爵の正反対の考え方がこの空間に入って来た。というのは、シュレーゲルの宗教的信条が、のちに表明されるところまでまだ発展していなかったにもかかわらず、彼は当時すでに最高の観念論を公言し、その意味でギリシア哲学史を私たちに披露していたからである。同時に彼は祖国ドイツへの最も忠実な愛に貫かれていた。また彼は、祖国蔑視への苦痛やかつての偉大と栄光への賛嘆を表明する機会を控えることはなかった。観念的と民族的というこれら二重の方向はシュレーゲルの場合一般にあらゆる観点で貫かれており、彼が私たちに行った古代ならびに近代の教養民族の文学についての講義や芸術に関する彼の判断でもそれは明らかであった。それは、彼が時折道を間違える逆説があるにも拘わらず、私たちを魅了した。なぜなら私たちは、まさにこの二重の方向が、あらゆる高尚なものにおいて、生活とその現象の条件において、人間的な働きにおいて適合していると思ったからである。しかし、私たちの頭が最高に柔軟になれたのは、シュレーゲルの講義だけでなく、この天才的人物ならびに精神と心情において非常に才気溢れる彼の夫人との交際のためでもあった。習得したり反論したりしながらも、テーブルを囲んでの会話や暖炉のもとでの打ち解けた夕べの語らいのお蔭以外の何ものもなかった。

シュレーゲル家の仲間は、サンスクリットの偉大な精通者 A・ハミルトンを除くと、小さなドイツ人コロニーを形成していた。これに属したのは、シュレーゲル夫人の 10 歳の息子フィリップ・ファイト、サンスクリットを学んでいる若き文献学者ハノーファー出身のハーゲマン、私たち 3 人のケルンの友人とベルリン出身のフォン・ハストファー夫人で、この夫人はフォン・ジャンリス夫人と一緒にパリに

【024】 | 【025】 来て、当時チュービンゲンのコッタ社でフランスの雑録を編集していた。テーブル仲間にふだん参加したのは私たちと並んでハーゲマンとフォン・ハストファー夫人だけであった。この若き女性は、月刊誌を頼りに新しいことがらを集め、広く尊敬されている美人のマダム・ルカミアや、有名な博物館長ドノン、その他多くの卓越した人物たちの後援を受けていた。そのため彼女は、研究でかなり孤独な生活に陥る他の仲間につねに多かれ少なかれ注目すべき報告をもたらす術を得ており、また、その批判では必ずしもつねに厳密でなかったから、シュレーゲルがしばしば冗談や機知で彼女を助け、そのために多くの陽気な笑いが起きた。シュレーゲル家ではこれ以上大きな会合が開かれることはめったになかった。しばらくの間、日曜夕方に数人の訪問があり、ごく親しい友人のほかはたいいてい未知の人で、とくにドイツ人であった。そのなかで私がまだ覚えているのは、のちに有名になったランツフート出身の医師ヴァルター、彫刻家マルティン・ヴァーグナー、フィレンツェ出身のバルトリニ、デュセルドルフ出身の画家コルベで、さらにカント哲学に大いに貢献した愛すべきビラスと彼の女友だちでリュベック出身の機知に富むロッデ博士 もいる。しかし、この時は、冬とともにパーティが増えることはなく、年明け後は目に見えて減った。日々不気味な噂が立ってきたからである。大きな陰謀が語られ大勢拘禁されたという話を耳にした。それどころか大都市の交通を大いに妨げるゆえにめったに適用されることのない規則があって、数週間遮断されることになった。ついにモロー、ピシュグル、ジョルジュが逮捕され、3 月には第一枢密院の命令でアンギアン公の残酷な誘拐殺人事件が起き周知のこととなった。こうした状況で住民が抱いた不安と暴力的な緊張があらゆる状況を圧迫した。外国人はどんどん姿を消し、劇場を訪ねたり散歩したりする人も減った。不気味な目をした権力支配者が登場したとき、拍手はほとんど聞かれなかった。誰もが親密な集団のもとに引き籠もり、公的な仕事に就いていない人は、至る所で

【025】 | 【026】 減少した外的自由をある程度自分の家庭生活で享受できることを喜んだ。私たちはシュレーゲルのもとで研究に没頭し、頻繁に博物館を訪ねた。そこでは古代人の彫刻や、ラファエロや、イタリアやドイツの彼の同時代者ないし先行者たちの画法が私たちを最大限に魅了した。その際私たちはヴィンケルマンを読んだが、彼を私たちに薦めたシュレーゲルによると、彼はあらゆる点で啓発的であり模範的であるとのことであった。劇場にも通ったが、そこではコルネイユやラシーヌのいくらか重要な悲劇や、優れたイタリアのオペラやグルックの作品が上演されていた。音楽に関する私たちの趣味形成に寄与したのはシュレーゲル夫人であり、彼女は老ファシュの熱狂的追随者であった。ファシュはベルリン歌唱アカデミーを創設し、この町をあらゆる上質音楽のドイツにおける拠点とすべく最大限協力した。

シュレーゲル夫人の未婚の妹ヘンリエッテ・メンデルスゾーンとその兄弟アブラハムも当時パリに滞在し、同じように音楽に魅了されていた。私たちは彼らを、新しく設立された音楽学校の朝の演奏会でしばしば見かけた。そこではケルビーニやモーツァルト、ハイドンの作品のほか、当時試みられていたレオやデュラント、ベルゴレージの曲も演奏された。尊敬すべきモーゼス・メンデルスゾーンの子どもたちとのこうした交際は私たちにとっても独自の価値を持っていた。というのも、私たちはすでに学校にいる時から、この賢人を高く評価する習慣があったからである。じっさい私は 11 歳のとき、彼の作品

『フェドンまたは靈魂不滅について』〔1767 年〕を学校賞の金本と見なしていた。その頃ケルンでは受賞本を金本と呼んでいたが、それは赤い皮に金箔とカットで括られていたからである。当時、音楽に対する彼の熱狂的な愛がその息子フェリックスでさらに昂じて全世界を彼の作曲で喜ばし教化することなど誰が予言できたであろうか。

シュレーゲル¹⁹と彼の家族との関係はまったくもって教導的で、それを私たちはただ感じ取るだけであったが、実際には主としてベルトラム²⁰の生き生きした記憶と叙述の才能によっていくらか換えられている。シュレーゲルは当時、彼の歴史的かつ哲学的な【026】 | 【027】研究の途上にあり、中世だけでなくカトリック主義についても好意的な見解をすでに持っていた。それゆえ、多くのことが彼によって受け入れられ注視されていたが、そういうものはベルトラムが帝国都市やライン沿岸の修道院や神学校の古い施設や風習について語ったり、礼拝や教会について語ったりすることのできるものであった。予め抱かれたなんらかの私念によってシュレーゲルはパリのノートル・ダム寺院を顧みなかった。この雄大な建物は、私たちが彼を連れて行った時に彼に深い印象を与えるに欠けるものはなかった。私たちが彼に、オランダやケルン、その他一般にライン沿岸の多くの古い記念建築物はこれよりはるかに高い満足を与えるであろうと約束したとき、彼の目は大いに輝いた。これらすべてが、かの時代の時代遅れの民俗や状態のゆえに非常に誤解されていたこれらの地域を知りたいという私たちの友人の願望を喚起した。しかし、彼の講演や彼との交際を非常に教育的だと思う私たちの場合、シュレーゲルがライン地方を気に入れば、私たちは非常に実り豊かな共同生活をまだずっと長く確実なものにしようと考えた。私たちがかつて注目したイエナは、私たちがパリに滞在している間、どっちみち最もすばらしく躍動しているときでも最善のメンバーが身を引くことで低迷していた。バイエルン政府は、シェリング²¹やニートハンマー²²、その他の人たちを、新たに獲得したヴェルツブルクやエアランゲンに招聘し、バーデン選帝侯²³はハイデルベルク復興に向けて交渉した。同時に、大きな世界貿易がふたたび非常に混濁し、新たな地上戦が勃発する危険も迫った。故郷で静かに研究して進展を待つのが私たちには願わしく思われた。シュレーゲルのために、たとえ一時的にすぎぬにせよケルンの高等学校での任用という見込みが提示された。ラインハルト教授²⁴とファーバー教授²⁵が活動していた学科である歴史と文学がまだ埋まっていなかった。両教授とも都合良く名誉あるロシア招聘を受け入れた。ケルンでは、政府が学校制度の新たな制定に取り組んでいたので、大学の部分的復興の可能性を期待する人たちもいた。つまり、シュレーゲルをケルンへの旅に促すのに十分な理由があった。彼はそれに乗り気で【027】 | 【028】1804

¹⁹ 石川補注：以下、「シュレーゲル」とだけ記して特記しない場合はフリードリヒを指すものとする。

²⁰ 石川補注：ヨハン・バプティスト・ベルトラム (Johann Baptist Bertram, 1776 – 1841)。ボアスレ・コレクションはズルピーツ (Sulpitz, 1783 - 1854) とメルヒオア・ボアスレ (Melchior, 1786 - 1851) のボアスレ兄弟とベルトラムとの共同作業の産物である。

²¹ 石川補注：フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775 - 1854)。

²² 石川補注：Friedrich Philipp Immanuel Niethammer (1766 – 1848)。

²³ 石川補注：バーデン辺境伯カール・フリードリヒ (Karl Friedrich von Baden, 1728 – 1811) を指す。1783 年にバーデン・ドゥルラッハ辺境伯として即位するが、1803 年に選帝侯の地位を、1806 年には初代のバーデン大公の地位を獲得する。「選帝侯」という記述から、この文章が言及しているのが 1803 年から 1806 年にかけてのことであるのが裏付けられる。

²⁴ 石川補注：Reinhard は日記の索引では Karl Friedrich Graf von Reinhard を指すとされているが、当時、この人物はフランスの外交官を務めており、ケルンのギムナジウムの教授であったとは考えにくい。

²⁵ 石川補注：不明。

年 4 月の終わりに私たちと共にベルギー経由でアーヘンへ行き、さらにそこからデュッセルドルフを経てケルンへ行った。1806 年に編集された書簡のための詩的な日記によると、オランダとライン地方を通る旅程で、ブリュッセルの新しい博物館とヨーロッパのデュッセルドルフの絵画館についての諸々の発言が大部分この旅行を通して生まれた。私はここで、私たちがアーヘンで体験した小さな出来事が忘れられない。私たちはそこで、ヤコービ²⁶達と、かつてパリで普通にやっていたようにあけすけに話をしていた。「第一執政官は次の皇帝として布告されるであろう」と。田舎では、首席官僚メヒン長官²⁷が、別の日に私たちにそのことを語り、私たちの無邪気さとそれに続く事情から私たちがなんら間違った噂を広めているわけではないと確信してようやく、私たちを叱責せずに釈放したが、不愉快な話である。それから数日後、非常に大きな変動から国が生き残ることになった奇妙な無知が公的な報道によって解消された。

シュレーゲルにとってライン沿岸で完全に望み通り期待通りにことが運んだ。彼は 1 年半フランス人のもとに滞在したあと、完全にドイツ民族の環境のなかで非常に快適に過ごし、ケルンで当時まだ非常に大きな特徴を持っていた生活諸関係も、反感を抱くより以上に彼を魅了した。じっさい衰頹していた社会的に重要な状況が、廃墟が偉大な建築作品を造るのと同様に想像力に作用し、語られるのを聞いたる痕跡を見たりする欠陥を補い、しばしばかつてそうであったよりも美しく豊かにした。もしかしたらかつての栄光が知られていないのかもしれないが、やがて高等教育の暫定的なポストが確定し、シュレーゲルが最初の夏学期に行った公開の文学史講義は老若男女からの盛大な拍手喝采を得た。同時にわが故郷の町の芸術が忘れられることがなかったのは自明のことである。ベルトラムは、市庁舎の礼拝堂にある町の守護神の大きな祭壇画 Altargemälde についてまだ記憶していた。この Altargemälde はケルンを扱っているあらゆる古い書物の中でも非常に芸術性豊かで有名なものとして引用されている。この Altargemälde は数年来礼拝堂から消えていた。【028】 | 【029】²⁸市庁舎助任司祭と呼ばれた総大司教制が廃止され、さらに彼とともに礼拝も廃止された。しかしながら、大変動の時代に、この町の古代遺産に大いに貢献したヴァルラフ教授兼司教座聖堂参事会員が指示して、Bild は完成した丸天井の中に片付けられていたために、破壊と投げ売りから救われた。より詳しく調べてわかったことであるが、長い間隠されていた宝は最近市庁舎広間の一つで再び展示されている。私たちは急いで向かったが、まったくすぐれた Bild の素晴らしさと固有性をシュレーゲルとともに十分に鑑賞することはできなかった。エウロペの第四片で、この名作が彼を真に熱中させた印象の最も賞賛すべき証拠が与えられた。冬の初め私たちが不在であった間に廃墟となった修道院や教会が撤去された。追放された住民が持って行かなかったり、政府の全権委任委員会が押収しなかったりしたものは、極めて下劣な性急さで商人や古物商に売られた。こうした暴力的な逆転によって、直ちにより多くのこれまで知られていなかった貴重な古い Gemälde が現れ、専門家や愛好家、特に司教座聖堂参事会員ヴァルラフと商人リーヴァースベルクによってそのコレクションに加えられた。私たちはその中に、たんにそれ自体非常に重要であるというだけでなく最大の期待を喚起する Bilder を見出した。その期待は、まだ闇と忘却の中に隠されているものがあるかもしれないという期待であった。

²⁶ 石川補注：日記及び書簡中には複数の Jacobi 姓の人物が登場するが、TB. V の索引によれば、ここで言及されているのは在野の哲学者フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi, 1743 - 1819) を指す。

²⁷ 石川補注：原文は、S.B. I では der oberste Beamte, der Präfekt Mechin、TB. I では der oberste Beamte, der Präfekt Mechin。Beamte と Präfekt は Mechin なる人物の肩書であろう。TB. V の索引には記載なし。詳細は不明。

²⁸ S.B. I. 29. [KA77 (2006)]

私たちが芸術作品について観たり聴いたりしたことの一切が、個々の宝が救出される恐ろしい難破を思い出させたことは、総じて奇妙な状態ではあった。どれぐらい多くの貴重品が嵐で沈んだのか、どれぐらい多くのものが激しい波濤で岸边に押し流されたか。こうした状況から引き起こされた気分で、救えるものは救いたいという願望がすぐに浮かび上がり、機会がある限り直ちに行動に移した。この機会は、人間生活においてしばしば決定的に作用する幸運な偶然を引き出した。というのは、私たちが戻ってから最初の数ヶ月内に起こったことで、私たちはシュレーゲルと共に町一番の大きさの広場であるノイマルクトを散歩していた時、私たちはいろいろな用具のついた携帯品に遭遇したのであるが、その中に、【029】 | 【030】²⁹黄金の光沢を放って聖人たちを遠くから照らしている 1 枚の古い Gemälde を見つけた。この Gemälde は、十字架を背負っている姿が泣いている女性たちとヴェロニカとともに描かれたもので、なんら取り柄のないものとは思えなかった。私がまずこれに気づき、近くに住んでいる持ち主に尋ねた。彼はこの大きな Bild がどこに放置されていたか知らなかった。彼は、要求した額で売り払うことができて喜んだ。さて、私たちはこの格納庫を考えねばならなかった。注目や嘲笑を避けるために、私たちはこの埃だらけの古物を裏木戸を通して私たちの両親の家に運ぶことにした。私たちがそこに着いたとき、年老いた祖母とドアのところでばったり出会った。祖母はこの Gemälde をしばらく見てから、いささかにはかんだ新しい所有者にこう言った。「おまえは感動的な（人の心を打つ）Bild を買ったねえ。良いことをしたもんだ」と。これが、これから続く未来の始まりに対する祝福の言葉であった〔この絵は 1827 年の目録番号 77 らしい〕。

最初のこの買い物の際、私たちは教会 Bild に対する軽視と悪い扱いについて酷いことを耳にした。私たちは追跡調査をした。最初は個々の要求を満足させたので、多くのものを粗野ないし無知の人間の手からもぎ取ることに成功した。私たちは競ってこうした努力を重ねた。私たち 3 人それぞれ幸運にも自分なりの Bild を持ったが、ときに自分なりの心配事もあった。それは、費用はわずかであるにも拘わらず、最も必要なものがときどき欠けていたことである。あらゆるリストを用いつつ、装身具や貯蔵品を譲渡して、活発に動きだした自己保存本能を満足させる手段を講じなければならなかった。だが最初は、非常に重要なものが何も手に入らなかった。最も注目に値するのは、市庁舎の礼拝堂の Bild から市の守護神の 3 枚の Bild を取り戻したことで、これは容易なことであった。小さな規格のこの銘板を発見したのはベルトラムで、のちに私たちはこれをヴァルラフと交換した。――シュレーゲルが古いケルンの Malereien について書いたときはこんな具合であり、それは 1804 年 9 月前半のことであった。当時ライン沿岸の住民は新しい皇帝の訪問で活気づいていた。彼は女帝ジョセフィーネとともにアーヘンから来たのだが、アーヘンにはカール大帝の遺品や遺蹟が兩人を非常に魅了していた。彼らはケルンに【030】 | 【031】数日間滞在した。凱旋門、オベリスク、碑文や照明のついた関連する Festgemälden は欠かせず、これらはすべてヴァルラフの申し立てに依るもので、彼はこうした祝典にラテン語の詩句や無装飾文字で装丁する術を知っていた。私たちは真面目な支配者を 3 度見たが、私たちが彼をパリで見たときよりも暗い表情はなかった。話によると、彼はケルンで、教皇が彼に王冠をかぶせるためにパリに来るであろうという報告を受け、それに大きな満足を示した。そして、司教の規定による戴冠式が聖職者によって直ちに実験的に行われた。

秋には、シュレーゲルは、シュトラスブルクを経てジュネーヴ湖畔のコッペにいるシュタール夫人のもとへ行った。彼女との繋がり、彼女がベルリンを訪ねたときに彼の兄のアウグスト・ヴィルヘルム

²⁹ S.B. I. 30. [KA34 (1005)] / S.B. I. 30. [KA77 (2006)]

がつけた。フリードリヒはその後パリで一時冬を過ごし、春にケルンへ戻って、私たちに、自然法と高等政治を含む哲学の概要についての私的講義を行った。この仕事は、ラインハルト大臣の訪問で短期間中断されただけで、ほぼ丸 1 年間を要した。大臣は夏の初めに家族を連れてハンブルクから来た。ハンブルクでは、フランス政府の代行をしていたが、結局、彼らの不興をかってしまった。1804年10月末、武装したフランス兵がハノーファーからエルベ川を越えて来て、中立地帯にある別荘でイギリスの代理公使である騎士ルンボルトをハンブルクで逮捕した。ラインハルトは、この暴力行為後、これが国際法に反するがゆえに皇帝の意志なしでなされたに違いないと表現することを許可した。容易に理解できることであるが、全能の支配者は、すべての法を超越する自分の立場を自分の使節が承認しようとしなかったことを悪く受け取った。ラインハルト大臣は、すべての公務から外されると信じ、フランス帝国のドイツ領に地所を買って住みたいと願った。私はライマールス家の忠実な門弟として、この要求に応えるべくできる限り役立つ努力をすることにした。訪問は、ボン地方のゴードスベルクの背後にあるいくつかの世襲財産を見ることに代わった。シュレーゲルは【031】 | 【032】 私たちと共にここにきたが、そこでラインハルト夫妻は、機知に富み知性豊かな人物との知遇を非常に喜んだ。私たちは晴れた数日をこの旅行で過ごした。当時なお領主財産と国民財産すなわちいわゆる御料地との重要な区別があった。前者は1モルゲン〔約30アール〕あたり70から80ケルン・ライヒスターラーを数えたが、後者はたった45から50ターラーで済んだ。この最初の試みは成果なく終わった。しかしながら、気品ある人物との関係を得る礎になった。この関係は次第に、生涯に亘る真に友好的な関係へと発展した。特殊な運命と功勞によってより高次のフランス国務に就いた人が、高貴で人間的な信条を保つだけではなく、ドイツ文学と教養に活発に関わり、しかも独自のシュヴァーベン的気分を保持していたことは、注目すべき快適な現象であった。ライン沿岸にしばらく滞在したのち、ラインハルトはアーヘンに湯治滞在し、それからパリへ向かった。私たちはしかし哲学の研究に戻り、これを絶えず続けて、最後は歴史研究に繋がった。シュレーゲルはこの年も翌年も私たちのためにほとんどすべて尽くしてくれた。彼は、兄がシュターール夫人とイタリアに滞在しているため、1805年から1806年にかけての冬もケルンで過ごし、私たちに哲学のほか世界史も講義してくれた。公的には彼は1806年夏に論理学と、さまざまな哲学体系の批判とを講義した。私たちはこの時はもともとシュレーゲルとその夫人とだけ共に生活し、毎日彼らと会い、しばしば一度以上会った。当時世界状況はドイツ祖国の友にとって悲しむべきものであり、特に外国支配の下にある所では、あらゆることを抑制しなければならなかった。ドイツの恥辱はもちろんすでに帝国代表団の主要決議の審議とともに格言になっていたが、分裂の辱めの結果はその恐るべき大きさと、オーストリアとプロイセンの不幸な日々の中かでようやく現れていた。のしかかってくる圧力の下で私たちは多少とも慰めと高揚を、【032】 | 【033】 ゲンツやヨハネス・ミュラーほか何人かの自立した人たちの書物に見出していた。だが、私たちにとって最も効果的であったのはアルント〔Ernst Moritz Arndt, 1769-1860〕の『時代の精神』で、この本は、プロイセン戦争勃発直前に私たちのもとに届いた。じっさいこれまでこれほど無制限に粗野な率直さと大胆さを持った本は出ていなかった。そうした信条を持つ人がいた国が失われることはまったくありえなかった。

しかしながら運命はその歩みを進め、国々は、服を着替えるように、その主人を変えた。だがつねに変化のなかで維持されるべきものを維持するために配慮する善意の人たちがいた。じっさい、そういう人たちが自身、何らかの非日常的で有用なものをもたらし、新たな支配者の傾向を利用しようとした。こうしてまさにやっと造り出されたベルク大公国において、デュッセルドルフに大学を設立するという考

えが生まれた。それは省内で真剣に取り組まれた。ペンペルフォルトのゲオルク・ヤコービはそれに最大の望みを抱き、シュレーゲルを招聘するための協議がすぐになされた。そうすることで、王家の私有物としてバイエルンに移された絵画館の損失を国が補填しようとしているかのように見えた。しかし、そこにプロイセンに対する出兵があり、ミュラ〔Joachim Murat, 1767?-1815〕が大公国を入手した際自らはなしたかもしれない平和的統治への見込みは夢となった。彼はこの国を二度と見ることはなかった。自分の主人との密接な関係が彼の心をとらえた。彼がスペインで流血の泥仕合を開始し、多くの出征をした後、ナポリ王として終わらざるを得なかったことを私たちは知っている。

だが、当時私たちを深く悲しませたのは公的な出来事だけではなかった。私たちの狭い範囲でも愛する兄弟の病気や、最高に機知に富み思いやりのある医師や、わが敬愛する祖母の喪失を悲しまなければならなかった。この非常に分別のある敬虔な女性は、たしかに 86 歳に達してはいたが、最後まで精神力豊富で、極めて静かで平和的な気分のままこの世を去った。彼女は、私たちの両親が死んで以降、10 人の孫を慈悲深く見守りなだめてくれた。私に対して彼女は特別の好意を寄せてくれたが、その理由は私には決して説明できない。私たちの医師ベスト博士は【033】 | 【034】多面的な教養のある洗練された人であった。彼は真に学問的な趣向を持ち、この点でも町に有益な影響を与えた。主として商業活動によって成り立っているような住民のもとで、この医師は好んで、学問的なことがらにふだん容易に欠けがちの尊敬を呼び起こすことに努めた。彼自身助けとなる不可欠の人物であり、信仰と注意力を持ち合わせていた。聖職者が自らの教区で、たんに教会に属するだけではない高級なものごとに信頼を寄せようとしたとしても、そうした信頼は、有能な司牧者にして神の言葉の管理人として彼が自らの立場において享受していたものであった。

隠遁すなわち私たちの暮らしの気分びつたりのものとして、シュレーゲルの静かな住居があった。庭に囲まれたその広い家には、カピトルの丘にある聖マリア女子大修道院長フォン・ブランカルト夫人がいた。この女性は、公爵の身分と豊かな収入のある貴族女子修道院のかつての責任者であり、他のすべての聖職年金生活者と同様に、毎年 500 フランを得ていたが、彼女は 70 歳を越えていたから手当ても 100 フランあった。この老婦人にはこれでも足りなかったであろうが、彼女の親族も時代状況からして彼女を支援することはできなかった。そこで彼女のかつての御者が、御料地の管理による大きな庭つきの修道院の建物を借り、それを又貸しして、庭に、閉じた聖職者サークルのためのワイン専門酒場付き九柱戯場を設立した。こうして、女子大修道院長夫人は、御者のもとにあるかつての大修道院のうちいくつかの部屋にふだん住むことになった。私たちはシュレーゲル夫妻を介してこの婦人と知り合いになり、時折彼女と会った。彼女には非常に美しい体つきと顔立ちの痕跡がいまなお見られ、そのきちんとした姿勢と信条においてまったく高貴で最良の意味で卓越した本質が表れていた。彼女は若いときからの七年戦争やケルンにいた当時のフランス部隊について非常に心地良く語ることができた。

シュレーゲルは、夏の終わりに、彼と非常に仲の良いフォン・ハルデンベルク氏の兄弟で、【034】 | 【035】ノヴァーリスという名で知られる小説家を、ヴェルツブルク近郊のウンターツェルに訪ねた。その後彼はフォン・シュタール婦人のところへ行ったが、彼女は当時パリから少し離れた、ノルマンディのオーバジャンヴィレにあるアコスタ城に滞在していた。その地でシュレーゲルは彼女に自らの哲学をフランス語で講義した。彼が言うには、それはいささか不愉快な企てであった。私たちはそのための彼の草稿を見てこう告白せざるを得なかった。すなわち、ドイツ哲学固有の表現は私たちからすると抽象的なフランス語では、私たちの活きたしなやかな母語と比べてはるかに奇妙に思われる、と。だが私

たちも、そうした翻訳が多く、点ですぐれた試金石となり教えられるところ大でありうることを理解した。

かのドイツの不幸な時代に、もっと良かった過去のあらゆることがらに慰みが求められ、周知のように、長く等閑に付されていた古代言語に人びとは飛びついた。ティークは1803年ミネ恋愛歌で賛同を得た。ニーベルンゲンとともにハーゲン〔Hagen von Tronje〕が登場したいだが、はるか高いレベルでそれはあった。私たちは、私たちの言語やそれに関する傑作の歴史について情報を得る必要があつて、すでにずっと前からシュレーゲルによってこの対象についての講義を受けていた。彼はオーバジャンヴィレから戻った後1807年夏学期にこの講義も行った。そして、シュレーゲルの名声・名望にとって最も重要なことは、彼がインドの言語と学識についての研究を完成させることであった。

公私ともに苦難のなかで研究に次いで私たちの大きな保養になったのは、祖国の古代芸術に継続的に関わることであった。この仕事はいろいろな満足を提供した。それ以上に魅力的だったのは、数百年の汚れの外皮を通して一枚の Gemälde の芸術的価値あるいは一般にその珍しさだけでも認識することであった。そして、清掃する修復者の手のなかに、なんらかの頭や美しい青や赤や緑の衣服の断片が明るみに出るのを見るときや、ロウソクの煤やその他の煙でくすんだ衣から苺の花や果実とか葶や他の春の花のある薬草が現れるのを見るとき私たちの喜びはどれほどであろう。【035】 | 【036】 こうした享受をしばし手に入れるために私たち自身どれほどしばしば湿った海綿をつかんだことであろう。というのも、修復画家が仕事をきちんと仕上げるまで私たちはその享受を期待することができなかったからである。この点で私たちは予期せぬ成果を得た。こうした方法で非常に価値ある Bild を毀損や忘却から引き離すだけでなく、芸術史にとっても多くの重要な発見があった。それまでは、ファン・エイク兄弟の作品といくらか類似してはいるが線描や品質の点でより不完全な Gemälde をもっと古いものと見なし、一般により古いものをより大きな不完全性に求め、頭や衣服の見方や形態の相異に求めなかった。したがって私たちが聖ローレンツ教会の玄関ホールで初めて、形が大きくて広い頭やしなやかな髪と髭、単純なふくらみのある蝶番のついた衣服などすべてが、柔らかで流れるようなタッチで仕上げられた使徒の Gemälde を見たとき、私たちはこの作品を疑いもせずイタリア風だと考えた。ローマの聖ルイジから出た金地の使徒胸像に似ているように見えた。この胸像を私たちはフランスの博物館にある修復場で見た（『エウロペ』第4篇35節）。また、私たちはそこにイタリア／ビザンチン芸術様式の見本を認めた。このイタリア的 Bild との類似性は、他面、私たちがこれまで最古のケルンの Malerei と見なしてきたあらゆるものとの差異性と同じ大きさであった。したがって、私たちはかの Gemälde を個別的現象と考えた。14世紀にイタリアとさまざまな交通があり、こうした Bild がイタリアからケルンへ来たということは容易にありえた。しかし、それは長く続かず、多くの Bild はもともとの起源が14世紀、一部は15世紀であることは疑い得ない。他方、私たちは銘文や暦年数の書かれた Bild を発見したが、それによって、完全性が劣るゆえにエイク兄弟より古いと見なされる作品がむしろ彼らの派に属することが証明された。それゆえ、ファン・エイク兄弟より以前のケルンの Malerei が、同時代のイタリアの Malerei 同様、もともとビザンチンの手本に拠り所を得ていること、【036】 | 【037】³⁰ケルンの Malerei が、大きな固有性を持ってはいるがかの伝承芸術の根本特徴から発展したことを確証するのに従来なんの知識もなかったことを認めなければならなかった。いくつかの放置された教会や修道院が撤去される際にあちこちで見ることのできた大量の Wandgemälde は、これら古ケルンのビザンチン様式化する画派の年代と包括的な

³⁰ S.B. I. 37. [KA29 (1005), KA30 (1005)]

活動をしばしば証明してみせた。私たちは、かの時代にケルンでしばしば起きた教会取り壊しの際に同様の Wandmalereien を見た。この目的のために数本柱が埋め込まれ、木製の支柱でこれを支えて、木材に火をつけた。柱が崩壊する瞬間、壁と丸天井から石灰層が剥がれ、その下から彩色された平面が稲妻の如く現れ、それから永遠に消えてしまうのを私たちは見た。古い絵を覆っていた石灰層が、一連の破壊が起こる前になお数日間立っていた建物に接する部分から、衝撃によって直ちに落ちてくることもしばしばあった。こうした奇妙な悲劇的方法で私たちの目の前に現れた Wandgemälde はたいてい赤や青その他一色のしばしば絨毯のような下地の個々のフィギュアで成り立っていた。これらの区画がたくさん並び連なっているため、フィギュアが実物大を越えないように見える。それらが一集団ないし一つの行為に結びついてくることはめったにない。

このように撤去されるのを見た教会の中でとくに私の記憶に残っているのは次の教会である。アウグスティノ会教会、ドイツ騎士団教会、カタリーナ教会、カルメル会教会、ドミニコ会教会、ドミニコ会女子教会、聖ゲルトロード教会、マルタ騎士団教会、ヨハネ教会、コルドウラ教会である。ズーベンゲビルゲ山地のハイスターバッハにある放置された大修道院で非常にためになる発見をした。そこで私たちは多くの Tafelgemälde を発見したが、そのうち 2 つ、使徒と聖大修道院長が描かれたものは、かの古ケルン学派で残っているうち最も完成されたものに属する。板を裏返して見ると、多くの部分に歴史的な構成が見られ、その多くの部分が市庁舎礼拝堂にあった Altarbild と極めて類似していた。その結果、それは、かの大きな Bild と同じ親方によって描かれたという、かの使徒たちのとった意見は、一つの確信的証拠を得た。じっさいこうして【037】 | 【038】 理念的なものと個別的なものとが独自に混じっているがゆえに、またそれと同様に、最高に温和で融合的であると同時に輝かしい仕上げのゆえに、うまく整理することのできない驚嘆に値する芸術作品にもその真の位置が与えられた。この作品は完全な自立性に達した古ケルン派に属し、より古い伝統的な芸術からより新しいまったく自然に忠実な芸術への移行点を示していると私たちは認識した。じっさいのちにゲーテもこの Bild を非常に的確に「低地ラインの芸術史の軸」と名付けた如くである（『芸術と古代』第 1 篇 163 ページ）。こうした状況のもとで私たちは次第に、私たちのもともとの、古代祖国の芸術作品の知見、救出、保存にのみ向けられていた努力を越えて、古ケルン画派の Tafelgemälde をできるだけ完全に手に入れ揃えたいとの願望が混じり、私たちが古代遺物商人や所有者のグループと知り合いになればなるほど、相当に費用を惜しまなければ最も重要なものをまだやっと獲得できるところまで来たにすぎないことを確信した。しかし、私たちは、芸術的価値の高い Gemälde が粗野な人間の手で破壊されたという最初抱いた推測は過剰であったの確信にも至った。もちろんあちこちで Tafelgemälde が窓の鎧戸や鳩舎、机面、傘に作り変えられたし、それどころか、鐘や古い鉄の買い手に、その重さゆえに誰も値を付けようとせず、じっさい場所を作らなければならない大きな Gemälde を買い取るという条件がつけられた、といったことも出て来た。広い回廊に埃や汚れで判別できなくなった大きな板が置き去りにされ、教会建築物のたんなる番人が、たいていは最も卑俗な習俗の人たちが住んでいる所にも板が燃料として燃やされることがあったかもしれない。しかしながら、私たちは、私たちの目に入ってくる多くの残り物や断片のなかに古い Gemälde を見つけたが、それは私たちが全体の一部としてより高度な意味を持っていると認識しなければならないような唯一のものというわけではなかった。しかし確かに私たちにとってますます明らかになったことは、最も卓越した Gemälde はそれに付着した古い名声によって普遍的な損壊から【038】 | 【039】 多少なりと護られたということであった。たいていのものはすでに 250 年前に教会装飾における新たな趣味を退け

なければならなかったし、附属礼拝堂や参事会広場、聖具室、宝蔵に移し置かれていた。そこでは確かにほとんど顧みられることはなかったが、たいていは良く保存されていた。精神的ゲマインデの廃止に際して、これら尊敬する価値があり、もともと決して軽視されるべきものでない古代遺物が、追放された会員たちのものとなり、一部は古い時代の反復のため長い時間しまっておかれるか、あるいは、保持された教会の責任者の意のままになるかした。この責任者は、長く放置された建物の修復のために最も必要な手段を欠き、その断片を司教ないしは上級官庁の賛同を得て処分しようとした。買い手にとっては、この道は遠く苦勞の多いものであった。それは多くに忍耐と辛抱を必要とした。私の愛する弟メルヒオアはこの道を歩んでどういう成果を得たか、彼が一般にコレクションの形成のために行ったことは何かについては後に話題になるであろう。

私はまずラインハルトのもとへ帰らなかった。彼は、ひどい怒りをかいたくないなら屈服し、弁理公使としてヤーシ〔ルーマニアの町〕へ送られねばならなかった。だが、彼はライン沿岸に家を買って住みたいという願望を捨てず、反対に、公的生活の渦から引き離された今、そうした願望をより一層切実に守り続け、また、子どもたちのために資産を、おそらく自分のためには静かな隠遁を確保する必要をますます感じるようになった。私は馬で国中を乗り周り、南フランスの軍の御用商人へのすべての債務を削除するため政府によって下取りされた土地を調査した。モンペリエ近郊のローデヴの人びとが、われわれの宗教財団の土地を購入申請するためやって来た。このことで私は、さまざまな側面から、ギルバツハの実り豊かな広野を経て、ノイス近郊の樹木豊かなエルフト河岸へ来ることになったが、そこで私は、自分の子ども時代好きだったラングヴァーデン教区に、今回は売り物として出会うことになった。私の善良な時代、父が私たちにしばしば親切に宿を提供してくれた古い空間を、たとえひどく荒れ果ててはいるが、その堅牢な設備のなかでなお【039】 | 【040】変わらずに再見することは、私にとって物悲しい気分であった。表面的にはいくらか放置されており、広い宮殿や庭園や池もそうであったが、隣接する森にある立派なブナは 10 年か 20 年の間にさらに立派になっているのを最近目にした。この地域では、私の保存衝動が極めて強く喚起された。私にとって愛すべき非常に多くの思い出のつまったこの土地が血縁の手に移るのを見たいという願望が、この土地の獲得は非常に好都合なものとなるであろうとの確信と結びついた。私はなお同地域にある 2 つの大きい宮殿を見つけたので、私は暫定的にこれら 3 つの部分すべてを購入する契約を結んだ。しかし私はその後不快になったのであるが、それは、ラングヴァーデンを購入するにあたり所有者の安全に必要ないくつかの形式の欠如のゆえにふさわしい土地に至り得なかったからである。そうして価値多き土地はのちにメゾン元帥の所有に帰した。私がヤーシへの旅行中に友人となった人に購入の報告をした時、彼がヴィーンから私に書いて寄こしたところによると、彼はそのことに最大限安心してこうつけ加えた。「親愛なる友よ、私たちはヤーシを経てケルンへ行き、私たちの心と想像力がライン川に近くなると同時にドナウ河口へ急ぐことになった、という点には変わりありません。おそらく私たちはいつかこの迂回が目的を達成するために必要であったとわかるでしょう」。――運命は事実その通りになった。というのも、フランスの弁務官がほぼ半年間ヤーシに滞在し、ロシアに対する門の宣戦布告がなされたからである。そして、ロシアの密偵の誤った熱意によってラインハルトはあらゆる慣例に反して捕虜の宣告を受け、ドニエプル沿岸のクレメンチェクに連行された。アレクサンドロス帝は、この報せを得るや、こうした恣意の承認を拒み、捕虜を直ちに釈放させ、自分の家族と共に最も名誉ある扱いのもとブロディーへ送った。真冬にロシアのステップ地帯を通ってのウクライナへの旅とガリチアへの帰還は、命に関わる危険な課題であり、かつ、6 ヶ月前の最

も強烈な太陽熱のもとでのハンガリー、バナト、ズィーベンビュルゲンを経てのヤーシへの到着とは奇妙な逆となった。旅行者たちは神を十分讃えることもできずに、彼はこの大移動において彼らや彼らの2人の子どもをあらゆる【040】 | 【041】病気から守った。彼らはブラハを経てカールスバートに来て、そこで鉱泉飲用療法を用い、ゲーテと知り合い親密に交際できたことを喜び、夏の終わりに再びラインへ帰ってきた。

ここで土地購入が再び追いかけて来た。というのは、ラングヴァーデンとの取引が駄目になったので、まだ別荘がなかったからである。このための手だてがあるはずであった。ズィーベンゲビルクの上方にある聖アポリナリスベルク教区と、もともとブリュールの城に属していたファルケンルスト園亭が提案された。前者の建物はまったくの廃墟であった。私は弟のメルヒオアと一緒にこれを、それに属する土地と並べて獲得したいと願った。これに対して二番目の建物は、美しい庭に囲まれた領主の経費で仕上げられた立派な併置建造物と共に最良の状態にあり、その部屋はいずれも私生活の基準や快適さを過度に越えるものではなかった。ファルケンルストを購入するようラインハルトを説得し、そのことによってこの高価な建物はその敷床や大理石の暖炉、天井と壁にある Gemälden、鉄の格子垣など多くのものと共に破壊から救うことに私は成功した。価格はこれを解体から救うことができるほど低かった。ボンの近くにある皇帝の狩猟館レットゲンは、解体して売りに出され取り払われた。アポリナリスベルクについて私たちは、この小さな土地を買って改修し、一方が他方に費用援助すべき時は分離が適切だと思なされるまでは、共同で所有しようということにした。2件の購入が1807年冬に行われた。2年間に亘るあらゆる変化に追われ多くの試練を受けた人の願いはこうして満たされた。ラインハルトは冬の3ヶ月をケルンにあるシュテルンベルク宮殿で過ごした（一時は3年前に新しい皇帝が住んでいた部屋で）。そこで彼は彼の非常に卓越した夫人と共に小さなサークルでしばしば内容溢れる精神と心情に適した談笑の機会を私たちに提供してくれた。自分自身の竈からの財産などほとんど期待していなかったのに、3月初めにはもう雪と氷の世界からファルケンルストへ出て来た。【041】 | 【042】そこで少々気温が低くても好天の日々を過ごした。

1808年冬私は大きく強度の不穏状態にあった。シュレーゲルの講義は終了した。芸術への専念、古いドイツ Gemälde の収集、芸術史とくに中世建築藝術の研究へと私の趣向は強く傾き、今年の初め私は大聖堂の測量に身を投じ、ドイツの偉大さの非常に哀しいことだが中断したこの記念碑を Bild の中で完璧に描くべき作品を情熱的に夢見始めた。これに対して芸術史の経歴を包む手段と能力に関する外から大量の困難と心配が生じ、ベルトラムでも私を慰め安心させることができなかった。彼は私に、世界はあまりに軽率で、あまりに無鉄砲で大胆だと示しているように見えた。メルヒオアはまだ若すぎたし、彼にとって2人目の教師である10歳年長のベルトラムの影響下にすぎた。私はまったく自分自身のみを頼るしかなかった。シュレーゲルやラインハルトとの交際はたしかにいくらか私の支えになったが、非常に多くのものを私に保証してくれたのは一人の若く機知に富んだ医師、シュミッツ博士の友情であった。彼に私が近づいたのは祖母の死後のことで、彼の音楽愛がとても私の気に入った。彼はヘンデルを賞賛したが、それ以上にモーツァルトを尊敬していた。私を夢中にさせたのはモーツァルトの作曲であり、もし私が言葉の才を持っていたならば私は私の魂を満たす思想と感情の世界を確実にそれにふさわしい形式で描いたであろう。――音楽家モイラーの家で夕方定期的に音楽愛好家の会合が開かれ、そこで当時の悲惨な状態のもとで多少なりとも満足の得られる音楽を聞くことができた。シュミッツは私をほぼ毎週1回そこに招待してくれた。この夕べは私に最高の享楽を保証してくれ、ついには熱狂と歓喜

の状態に陥れ、1ヶ月ほぼ毎日完全な私たちで心情を書き記すことになった。

私は深い憂鬱に襲われ、【042】 | 【043】それに子どもの時からの弱い健康が加わったかもしれない。生きる喜びをすべて断念した人のように私はまったく孤独で見すてられた気がしたが、最後には次のような希望を持ってなお元気でいられたことは感謝すべきであろう。その希望とは、貧しい鉋夫が、より幸福な兄弟が掘り出し加工し享受するはずで、その際下って来る仲間を愛情いっぱい思い出すであろうような仕事ができたらという希望である。私がこれらの言葉で示唆するのは、ケルンの大聖堂についての私の頭の中にある作品であった。心胸と精神と信仰の最高の出来事一切が、私の熱狂的な吐露の中で、ある時は普遍的に、ある時は特殊な私たちで、言葉になった。人生においても芸術におけると同様に目と口の中にある深い表現が熱狂的な考察の表現となった。ラファエロの *Gemälde* がその際特に頭に浮かんた。他の時に私が表現したのは、音楽の包括的な力と意味に対する私の嘆賞であった。すでに交響曲や演奏会作品においていかに大きくその嘆賞が現れるか、そこではそれが3つの方向から、能力と権能と壮観、悲痛と悲哀と憧れ、そして最後に、喜びと快感と歓喜を具現する。どれほど心の籠もった生活が歌の中に啓示されるか、どれほど豊かで活発な世界がドラマ音楽の中で発展し、どれほどの気高さと崇敬が宗教音楽で発展するのだろうか！

私は当時一般に芸術の根本原因として、神を模範としてその尊崇のために新たな創造を産み出す人間の多少なりとも意識された努力を認めていた。建築芸術は新たな地盤、新たな住み処を創造し、*Malerei* と彫刻は動植物や人間の新たな形態でそこに人を住まわせ、最後に音楽は新たな調和的音響で満ち、讃歌や祈祷歌を天国の三一的な主にまで持ち上げる。

最古の時代から現代までの芸術や世界史、人間精神の歩みについての私の考察はすべて、より高いものへの、いわば地上の神の都市での無限の建造物におけるあらゆる教養民族が試みだし試みるのを止めない高揚へと私の注意を向けた。

当然ながら、この方向での私の熱狂的【043】 | 【044】吐露を包み込んだのは、ケルン大聖堂の高度な意味での完成を私の詩的散文で叙述する試みであった。

さて、私の人生が転換点を目指しているとしたら、私たちの友人であり教師でもあるシュレーゲルの状態も少なからず同じであった。ライン河畔の快適な地に対するあらゆる見込みが消えた。他方、彼の兄アウグスト・ヴィルヘルムは、最近ヴィーンで戯曲文学についての講義を行った。そしてその教養高く上品な世界で賛同や関心を見出して彼を勇気づけた。フリードリヒもヴィーンで公認の教師兼学者として名誉ある経歴を基礎づけることができるであろう。したがって、アウグストはフリードリヒにここへ来るようにと招き、彼が同じ聴講者サークルを前にして新旧の文学について講演をするように準備を整えた。シュレーゲルは1808年4月にケルンを去る準備をし、彼の夫人はさしあたり私たちのもとに留まることとなった。私たちはこの旅行について考え込んでいたが、2人はある日、4月16日であったが、自分たちは今朝カトリック教会に行った、と説明した。これは私たちにとって大きな驚きであった。私たちはたしかに、カトリックの信仰と司祭のためにシュレーゲルをつかんだ決定的な傾向をずっと前から知ってはいたし、彼が自分の確信をいつか公的に告白するであろうことは予見していたので、彼が私たち自身と宗教心情を一つにするのを知ることは嬉しかった。しかし、純粹に良心のことがらである改宗が外的意図の見かけとそれによる嫌な憤りをととても容易に喚起しうるこの瞬間、非常に重要な一歩がなされたことを理解することは、私たちにとって重苦しいことであった。2人の友人はもちろん私たちに保証して、自分たちはまさに個人的状況の点でも時代状況の点でも同様にこの一歩をまったく静か

に行い、したがって私たちにもそのことについて事前に言わなかったし、また、ふさわしい時が来るまで完全な秘密を約束していたとのことであった。しかし、シュレーゲルが出発して2, 3日するかしないうちに、フランス語のケルン新聞がこれを報道し、彼らの行動が意図的に公にされ、しかも大聖堂で行われたかのように書きたてた。この状況、つまり告知された日は【044】 | 【045】 真実ではないが、しかし、記事の筆者にとって問題はただ改宗を言いふらすことにあった。彼が教会に対する間違った熱心さから、あるいはシュレーゲルに対する悪意からなしたことだとしても、それで十分であった。私たちが最初に伝えられてすぐに懸念した不機嫌は過剰なほど降りかかり、新聞の内外で極めて不適切な噂話が生じて、誰も何も得ることのない推測や屁理屈に終始した。私たちは友人の誠実さを守るためにあらゆることをしなければならなかった。彼らが良心のことがらと考えていることを世間に触れ回りたいとは思わず、自分たちの確信を胸の静かな聖地で育むことを望んだがゆえに、正しい時間と機会においてそれを否認しようとはしなかった。――もちろん、ラインハルトは、私たちに最も熱心に尋ねた一人であった。しかし、私たちの意見と意図の公的な提示に対して彼は、高貴な心情の持ち主として彼の疑い深い思想を早急に捨て、シュレーゲルが現実に関心し自分の確信に従ったことを認め、彼がどのようにして自分の精神と知見をもってそこに至り得たかは彼にとって不可解なままであった。